
永久に、待ちぼうけ

志渡あさみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永久に、待ちぼうけ

【Nコード】

N6654Q

【作者名】

志渡あさみ

【あらすじ】

「人生は旅。人は旅人。つまり、この世界に終わりはない。」
転校早々、自己紹介の際に黒板にでかかそんなことを書き出したかなりおかしい転校生、藤堂あきら。どう見ても女子なのだが、自らのことを「僕」と呼ぶ。

そんなあきらを押し付けられてしまった不幸者は学級委員のトモだった。トモの家は民宿を営んでおり、学校を出てからも後を付いて来るあきらに嫌な予感を抱いたため、問いただして見たところ…
予感的中。なんと、今日からトモの家に下宿することだった。

いきなり始まった変人との共同生活。笑いあり涙ありで送る、これぞ青春の醍醐味的物語。

只今3丁目の民宿に変人注意報発令中。お近くを通る際はご注意ください！

とある旅人の戯言（前書き）

ゆるゆる青春ラブコメものです。（なんだか王道なキャッチフレーズ。）

へたれ男子、めがね男子、草食男子、揃ってますよ。肉食もごくたまに出演。

おっさんぽい女子、おじガールも出てきますよ。おっさんっぽいと言われた貴女、必見。

誤字脱字、ご了承ください。ご指摘いただければ少しずつ直していききたいと思います。

10人いたら10通り、一つの言い回しをさまざまな意味で受け取られるかと思っています。不快な表現等ございましたら申し訳ありません。

とある旅人の戯言

果て、なんて、見えなくていい。

永遠を信じ続けてる、そんな夏の日の少年のままでいたいだけ。
ほんとは何も欲しくなんてなかったんだって、そうなんだって、
今気付いた。

生きる意味が見えなくて、ここですべて終わりにしようかとか、
思ってもみたんだ。

それでも、いざ、この体が世界から消えたところを想像すると、
哀しくて。涙を流した。

いつか問うた生まれてきた理由は、ますます曖昧になって、僕を
死ぬほど苦しめた。

何を手に入れたら楽になれるのでしょうか。

誰に巡り会ったら心休まるのでしょうか。

いままで何人もの人間に遠まわしに問いかけてきたけれど。

答えられたのは、そう。君だけ。

君はそれを、僕が探していた答えだとは思ってもみないだろうけど。

君の、その、

ずいぶん前に幼馴染へ宛てて出した手紙。返信は未だに来ず。
来る日も来る日も、ポストの中を念入りに調べるようになってからもう何年が過ぎたことか。

毎朝、七時。それは、配達された牛乳と新聞を取る際の習慣と化していた。

三年。いや軽く四、五年にはなるのだろうか。

玄関の戸から半身だけ乗り出しポストから牛乳瓶二本とおまけのヨーグルト、それから新聞を抜き取った。

『今日もなかったか』

うな垂れてため息をつきつつ引き戸を後ろ手に閉めた。

「お、智仁^{ともひと}、おはよ。」

その声に、眉を八の字にしたまま顔を上げると、玄関の正面にある階段を下宿人の有本さんが大きなスポーツバッグを肩にかけてちようど降りてくるところだった。

「あ、おはようございますっ」

俺はすかさず挨拶を返した。

有本さんは、長身と端整な顔立ちに加え、自分の稼ぎで大学に通っているすごくよくできた21歳。21歳と言えば、現在18歳である自分の三年後の年齢なわけだけど、俺はあと三年でそんな立派な男になれる自信はまったくなかった。

白い無地のTシャツに程よく色落ちしたジーンズ、それにグレーのベストを羽織りシルバーのリングをさらりと首からさげている。実に嫌味のないシンプルな格好の本日の有本さん。素材がいいと余計な飾りなんていらないなあと思う。

自分より背の高い有本さんを見上げ羨望の眼差しを送っていると、有本さんは犬のような顔で「どうした？」と問いかけながら爽やかに微笑んだ。ちらりと見えた歯並びがまたいいのなんのって。

有本さんの、水のように清らかな香水のにおいに魅せられ、街灯に群がる夜光虫みたいにつらつらと引き寄せられそうになったが、寸前で我に返って一歩後退。（いやいや、俺にそっちの趣味はないぞ。）

そして今の自分の格好を改めて見下ろすと、腰骨よりもはるか下にずり落ちたジャージからトランクスが盛大にはみ出していて、かつこよく無造作になっている有本さんの髪型とは違い、かつこ悪い無造作ヘア―（寝ぐせ）が俺の頭の上には乗っていた。

なんて様だ、と、とりあえずジャージを腰骨あたりまで引つ張り上げると、股の布のもたつきのせいで短足ぎみだった足がほんの少し見栄えが良くなった。―（もとからそれほど長い足ではないから、ズボンがずり落ちてるのなんて気にする必要もない気がするが。）
「にしても、今朝も早いですね。」

言って、俺は、脳天の寝癖を手で撫で付けながら、そういえば有本さんの寝起きの顔を一度も見たことがないなあ、と思う。なにせ、毎朝出くわすのは、支度を完璧に整えた後の爽やかな有本さん。かれこれ一緒に住み始めて三ヶ月がたとうとしているのに、何時に起きていいのかさえもよく分からないのだった。

「うん。今日もサークルの朝練でさ。あ、よかつたら今度おいでよ。」

「ほんとですかっ 行きますっ 絶対っ」

有本さんはサッカーサークルに所属していて、そのチームは県内でも三本の指に入るくらいの強豪。さらにプロ入りをした選手も数知れず。いつからかすっかりサッカーオタクになった俺にとって憧れのサークルなわけである。三ヶ月間、誘われるのを期待して待っていた甲斐があつたというものだ。

「じゃあ、行ってくるね」

「へいつ いってらっせえっ 旦那っ」

あはは、と手を振りながら、有本さんは靴を軽くつつかけて玄関を出ていった。

「はあ、やっぱいい人だなあ、有本の旦那は」

引き戸が完全に閉まり、つい心の声を漏らすと。

「ふん、」と、背後から小ばかにしたようなそれが聞こえた。

せつかく登った眺めのいい山頂から、一気に引きずり落とされたような気分になる。

むっとして振り返ると、「げ、当摩^{とま}。」

案の定、そこにいたのはヤツだった。

「ふん、今朝もバカ丸出しでご苦労なことで。本当にお前はバカの申し子だな。」

当摩は再度小ばかにしたように鼻で笑うと、黒縁のメガネを細く長い指で軽く押し上げた。

こいつも有本さんと同じく家に下宿している口で。そしてあるうことか、同じ高校に通い、同じクラスに割り振られ、さらには苗字がさ行一（佐和）とた行一（当摩）なために、出席番号で並ぶことがあると、当摩は俺のすぐ後ろにいて負のオーラでもって俺を呪い殺そうと企てている（ように感じる）。そんなこともあって、わざわざ同じ高校に通うために俺の家に下宿しているというその事実が未だに受け入れられないでいるのだった。

「んだとコノヤロツ 今日という今日は追ん出すぞコラツ」

言って、すでに制服に着替えている当摩の胸ぐらに掴みかかると、ヤツは涼しい顔で「野蛮人が。」とさなりと言うとずれたメガネを人差し指で押し上げる。それを見てさらにイラツときて、腹立たしいほどによく結べているネクタイを左右に引っ張って氣道を締めた。と、そこで今日もまた邪魔が入った。

家の真ん中を通る長い廊下の向こうから「朝ごはんできたわよー」と母さんの声が。

「離せ、飯だ。」と、当摩。

「っ、くそっ」

俺は握っていたネクタイを当摩の胸に投げつけるように離れた。

「まったく、これだからバカは困る。」

当摩は乱れたワイシャツの襟元を手際よく直し吐き捨てるように言うと、母さんがいる食堂へと体の向きを変え、無防備にも俺に背を向けるものだから、

「敵に背を向けるとは、バカめっ」すかさず当摩の隙をつきその背中に体当たりをかました。

びたんつと大げさな音を立てて当摩は廊下に倒れこむ。俺はその上に圧し掛かり、当摩のメガネのレンズが木っ端微塵になって、その陶器みたく白い頬に赤い筋が入って。俺、啞然。

「ちよつとっ 朝から何やってるのっ」

そしてその騒音を聞きつけた母さんが食堂から飛び出してきて。

「きゃああああっ」

当摩の血を見てこれまた大げさな悲鳴を上げた。そして即、貧血を起こして後ろ側へ倒れていった。びたん。

もうなんか、なんかもう。二人とも廊下に倒れてるし。

「わるい、当摩。やりすぎた」

とりあえず、血を流している当摩の上から下りた。

「……」

無言で体を起こす当摩。腕の力で上半身を持ち上げ胴をひねって俺を振り返った。

メガネのフレームが瞳を取り囲んでいないその顔はいつもよりなんとなく物足りないが、それはいつもと比べてという意味で、変だとかそういうことではない。一重まぶたの瞳は静かに力強くあつて、それでいて俺を冷たく映していた。

石膏の像のような当摩の顔をいつもなら女みたいだとバカにするところだが、今はその、目尻のすぐ下についた赤い線のような傷に目がいき、女顔に関しては触れなかった。

「当摩、大丈夫か」

「……」冷めた視線は軽く零度を下回った。氷点下だ。

「当摩、口も利けないくらいにショックなのか」

いよいよ本気で心配になってきて、眉を八の字にし、俺は氷点下

のその瞳を覗き込むようにじつと見つめた。

「だ、大丈夫だって。こんなん唾付けときゃあ治るってっ」

言って、俺は自分の人差し指を舐め当摩の傷口に付けようとした。すると、すかさずその手は払われた。

「やめろっ 佐和^{さわ}、お前ってほっんとにバカだなっ 唾液は汚いんだっ 余計傷が悪化するっ」

「そんなことゆーなよー、ほら」

言いつつ、まだ湿り気を帯びている人差し指を当摩の顔に近付ける。

「やめろっ 早くその指拭けっ」

ぴっしとそう言って当摩は立ち上がり、粉々になったメガネを後回しにして、廊下に倒れたまま意識のない母さんのもとへ近付く。片膝をついてしゃがむと、「大丈夫ですか」いつもどおりの落ち着き払った声だった。

君の、その、(2)

★

『民宿 佐和』

読みづらい達筆の字でそう書かれた看板を家が掲げ始めたのは、俺が生まれるずっと前のこと。

洗濯機とか、クーラーとかが著しく進化を遂げた、古きよきあの時代。親父と母さんは運命の出会いというやつをしたのだ。

ティッシュ配りのバイトをしていた母さん。蛍光黄色のジャンパーに黒のヒール。後ろで一つにまとめたつややかな黒髪。なにより、ほどよく筋肉のついた白い生足に一目ぼれ。って、親父はよく中ジョッキ片手に語っている。そんな親父とは反対に、母さんはそのとき、何度もティッシュをもらいに来る親父をただのヘンタイだと思っていた。要するに眼中になかったのだ。親父は勝手に、その無骨な心に宿った恋の炎に槓をくべ燃え盛らせると、迷惑がる母さんに猛アタックを始めたのだった。

「迷惑だったわよお、そりゃあ。」

なんて、昔をふり返る母さんはまんざらでもない様子。しつこいくらいに愛をさけぶ親父の誠意が、実はとても嬉しかったんだと思う。

そんな親父の努力の甲斐あって、出会ってから数ヶ月で二人は結婚。スピード婚だった。そして、今は上京して家にいない兄ちゃんが生まれ、それとほぼ同時に、親父の長年の夢であった民宿の経営が始まった。

苦労もそれなりにあったけれど、どんな時も親父は弱音は吐かなかったし、母さんはそんな親父をどんな時も信じてついてきた。

やがて、親父の人柄の良さと母さんの美貌とが評判になり、人が

人を呼び、『民宿 佐和』はなかなか流行りだした。民宿の経営も軌道に乗ってきたし、そろそろ二人目なんてどうだい？そんな軽いのりで生まれたのが俺だった。

今は、当時ほどではないけれどそれなりに下宿に訪れる人はいてそのなかにはこの民宿が出来た当初からの常連さんなんかもいる。旅行気分で来る人、通勤通学のために長期に渡って滞在する人、たまに家出してきた人とか、猫なんかも居座っていたりする。

そして、下宿人の入れ替わり立ち代りの多い四月を過ぎて落ち着いた現在では、二名ほどがこの民宿に住んでいる。

一人は、一つ屋根の下に住み始めて三ヶ月がたつても人間くさや癖とを見つけることができない爽やかな現役大学生、有本^{ありもと} 優治。

ひまわりが咲く頃が誕生日だということで、おそらく今年の七、八月で22歳。背丈は185センチくらいはあるとみた。おおらかで社交的な性格。そんな性格から推測できる通り、血液型はO型であった。特技はスポーツで、特にサッカーを得意とする。有名な大学の有名なサッカーサークルに所属していて、現在、そのサークルの女子マネージャーはほとんどが有本さん狙いだという（有本さんの友達からの情報）。そんなモテる有本さんだけど、現在カノジョはなし。そういえば、『つらい恋はもうしたくないね』と、いつか本人がぼろつとこぼしていた。何気なく言っただけには寂しそうな目をしていた記憶があるので、大学生活も残すところあと1年になつてからわざわざ下宿を始めた有本さんは、もしかすると、過去のつらい恋が居住地を移らないといけない理由だったりするのかなあなんて、勝手にイケメンの下宿事情を想像していたりする。

君の、その、(3)

そしてもう一人の下宿人は、毒を吐きまくる男、とうまやつき当摩臯。

草食だか小食だか知らないが、肉付きの薄いガリガリの色白野郎なのだ。脳みそにはシワがやばいほどに刻まれていそうだが、どうもそういう人種は何を考えているのか分からなくて苦手だ。当摩がこの民宿に来たのはもう2年も前のことで、少ない手荷物とともにすました顔でここを訪れた当摩を初めて見た瞬間、もうすでに気が合わないことは直感的に分かった。それなのにまさか、同じ高校に通うことになるとは。予想できることではないにせよ、盲点だった。「おい、トモ、」

隣の席から伸びてきた肘に小突かれ、今が朝のホームルームの間だったことに気がついた。

呼ばれたほうに振り返る寸前、青空に浮かぶ雲の形が『盲点』の二文字に見えて、思わず二度見した。

窓の外を長いこと眺めていたから、教室の中に視線を戻すと異様に暗く感じる。

教壇に立つ教師から見て右側の一番後ろ。ついでに窓際。教室の四隅の一つに席を構えた俺は、担任のカツラがずれてるかどうかわりも、どうも窓の外ばかり見てしまう傾向にあった。

「トモトモ」

「ん、なんだよ。ていうかトモトモって呼ぶなよ」

隣の席には小、中、高とまるで一貫校かっくらに同じ学校に進学し続けている男、作倉つくぐらが今日も浮わつた感じで座っていた。

「いいじゃん、かわいいじゃん、トモトモトウモロコシ」

「トモトモトウモロコシじゃねえし。トモトモトウモロコシだ。」

「うひゃひゃっ　ウケるっ　なにそれっ　ウケるっ　なにそれっ！
？　ウケるっ」

「しいて言うなら、俺はトモトモ当摩殺しだっ　今日も当摩の命の

次に大事なメガネ割ったしっ」

「やばっ え、やばっ あっひゃっひゃっ」

念のためにもう一度言っておくが、今はホームルームの真っ最中である。

要するに、だ。俺たちは五月の八エであり、かなりのバカどもである。

作倉に混じって下品に笑いだそうとすると、突如、背中に悪寒が走った。凍てつくような冷ややかな視線を感じたのだ。

振り向くと、廊下側の後ろから二番目の席で黒縁メガネ一（もしもの時のために同じデザインのものをストックしてあるらしく、朝の出来事などまるでなかったかのように、新品のメガネで登校した）に光を反射させた表情の読み取れない当摩がこちらを見ていた。というか、俺、を見ていた。

「うっせーな、おまえらっ さつきから学級委員決めるつつてんだよっ 話を聞けっ」

担任の怒鳴り声とともに、いつの時代かと思わせる懐かしのチョーク飛ばしが炸裂。

「うおっ」

「うべっ」

担任の声に振り向いた俺は額のだ真ん中に。作倉はこめかみにそれを受けて椅子ごと床に倒れ込んでいった。

「やべえっ いてーっ」

頭蓋骨に響いたその衝撃に思わず涙目になった。

床に倒れた作倉はなかなか起き上がって来ない。

「おい、作倉、しっかりしろ」

上履きの爪先で軽く作倉の背中をつついてみたが反応はない。

困り顔で視線を上げると、はたと、当摩と目があつ。無表情な当摩は担任のほうに向き直ると、

「先生、学級委員は佐和君がいいと思います。」

拳手をしつつ、ポテトチップの塩味よりもさらにさっぱりとした

態度でそう言った。

「そうだな、うるせーし、ちつとは真面目になるだろ。じゃあ決まりだ。」

「は？」

「吉川の代理の学級委員は佐和、おまえに決まりだ。」

「え、ちょ、ちよつと」

「佐和でいいと思う者は賛成の意思表示として拍手を」

担任がそう言った途端、教室内のやつら全員が拍手をし始めた。

「お、おいっ　ちよつと待てっ」

「よし、今日からおまえはこのクラスの委員長だっ」

拍手喝采。鳴り止まぬなか、俺だけはげっそりと机に突っ伏した。今思えば、これが、すべての元凶の始まりだったのだ。

作倉はまだ床で寝ている。俺は机で今さらながら気絶したふりをしてみた。

「それじゃ、だいぶ待たせたが、転校生を紹介しよう。」

転校生来るのかよ。聞いてねえよ。学級委員決めるのなんて転校生を招き入れてからにしろよ。そしたらその転校生が学級委員だったかもしれないだろ。ていうか、転校してくる時期間違ってるだろ。季節はずれにもほどがある。今はもう6月だ。にしてもなんだよ、クラスのやつら。俺が学級委員？俺、何か悪いことしました？

悶々と、自分を学級委員にしたやつら全員にいつか仕返ししてやるうと考えていた。特に当摩には盛大な嫌がらせをしてやるうと、上履きをう○この落書きで埋め尽くす計画を思いついた。

そっいえば最近う○こ書いてないなあ練習しとこ、なんて自分の世界を繰り広げていると。

「自己紹介してやってくれ」と言う、ありきたりな一連の流れが聞こえてきた。

へそを曲げていることを全身でアピールするために、顔まわりを腕でがっちり隠して机に突っ伏していたわけだけれど。俺を陥れたやつら（賛同して拍手したやつら）が「わあ」とうっとり気味のた

め息をついたものだから、転校生がどんな容貌なのか、気になって気になって、うずうずしてきた。

ここで顔を上げたら、学級委員を引き受けることを承諾したみたいで嫌だった。いや、でも、転校生が、転校生が、気になるっ
いや、でも、でも…

「うわ、すげ」

と。隣の席から、いつ目を覚ましたのか作倉の声がした。

それに条件反射のように反応して、今までの葛藤なんかすっかり忘れて俺は顔を上げた。

その瞬間、腰まである長い黒髪が視界のど真ん中に入ってきて、チヨークを打ち鳴らし黒板に荒々しい字体で何かを書き始めた細かい後ろ姿が教卓の向こうにあった。

カツカツカツ。チヨークと黒板がぶつかり合う激しい音に混じり、キィキィという鳥肌が立ちそうな音も時々聞こえてるものだから、耐えきれなくなった女子数名は両耳を手で覆った。

さっきまで黒板を背景にして立っていた担任は教壇から追いやれ、窓際に吊るされたカーテンに埋もれるようにして立っていた。

隣の席の作倉は床に座り込んだまま口をぽかんと開け、全クラスメイトの視線を一身に受けている転校生を、例外でなくまんまるの目で眺めていた。

転校生は最後の一文字とおぼしき字を書き終えると、チヨークを黒板消しの隣にことりと置いた。

そして、おそらく本人にしか解読できないであろう黒板の荒れ狂う文章―（とおぼしきもの。）を読み上げた。

「人生は旅。人は旅人。つまり、この世界に終わりはない。」

新任の教師よりもはるかによくとおる、春の風みたいに勢いがあって爽やかな声だった。

が、しかし。黒板の文字は担任が怒り狂って書いた汚ねえ字よりもさらに汚くて。こんな字を書くななんてどんなに恐ろしい顔をしているのかと想像を巡らせた。

きつと、ゴリラみたいな女子だ。あだ名は『ゴリ』で決まりだ。みんなにからかわれる光景が目に見え。少し、可哀想だった。もしそんなふうになったとしたら、俺はゴリを助けるだろうか。いや、いやいやいや。…どうだろうか。

また新たな葛藤に頭を悩ませていると、ゴリ、いや、転校生がグレーのタータンチェックのスカートを翻し、クラス全員のほうを振り向いた。

黒髪の奥に見えた輝くその瞳を見た途端、葛藤は瞬く間に消え去り、机に突っ伏していた時に聞こえた皆の「わあ」と言うつつとりとしたため息を思い出した。

からかわれる心配など、実に余計な心配だったと、愚かだな自分、なんて思った。

「僕の名前は藤堂あきら。草冠の藤、^{ふじ}堂々巡りの堂、^{どう}あきはひらがなであきら。よろしく。」

君の、その、（４）

…僕？

俺の目には、君は女子にしか見えないのだけでも。

目が点の、ハムスターみたいな口をした困り顔の顔文字のとき表情で、ゴリ、いや、転校生―藤堂あきらを見つめていると、一瞬どよめきを見せた教室はまた静まり返った。

小学生の頃、女子が自分のことを『俺』とか『僕』と呼ぶのが流行った時期があったことは覚えていたが、大抵の女子は中学生までの間に『私』とか『ウチ』とか、いくつかある選択肢から一つを選び、それで固定されるはず。この歳まで『僕』を引きずるとは、藤堂あきらとは、近年稀に見る類いの女子である。

おもしろいなあ、はは。なんて思いながら椅子の背もたれにずるずるとおっかかり腕を組んで余裕をかましていると、

「じゃあ、学級委員、そういうことだから。昼休みに藤堂の学校案内よろしく。」と、担任は言った。

昼休みつぶれるのかあ、可哀想に学級委員のやつ。ははん。なんてなーんて思っていると、佐倉が横からつついてきた。

「おい、学級委員でおまえのことだぞ。ぶ」堪えきれずにさりげなく笑う作倉。どうやら、俺の余裕ぶつてる顔がツボだったらしい。

「は？ 俺？」現実を受け入れられない俺。

「そうだよ、佐和。おまえだよ。」少し離れた席から現実を突きつけてくる当摩。手元に輪ゴムがあったら、即、狙撃したかった。

*

「ここが便所で、あそこが図書室。図書室で漏らしそうになったら、ここに駆け込めばいいってわけだよ。便利っしょ。」

男子便と女子便の間にある水道の前に立ち、藤堂あきは鏡に映

る自分の姿には見向きもしないで、男子便と図書室をひたすら見比べている。俺の説明を聞いているのかも怪しい。

あれから、藤堂あきらの席が俺の後ろに設けられ一悶着ありながらも昼休みになった。購買で焼きそばパンとメロンパンをいち早く手に入れ藤堂あきらの学校案内に取りかかった。

並んで教室を出てから今に至るまでに藤堂あきらが発したことと言えば「メロンパン食いたい。あきらって呼べ。」それだけ。あとはひたすらメロンパンを無言でかじり、同じく焼きそばパンをかじりながら学校を案内する俺の隣を歩いていた。

「藤堂、あとどっか案内して欲しいとことがある？」

「あきら」

「あ、ああ。あきらって呼ぶんだったな」

「うん」

言つて、藤堂あきら、いや、あきらはメロンパンの入っていた袋を俺の胸に押し付けると、手の甲で強引に口を拭った。

「お、おい、人にごみ押し付けんな」

と、そんな俺のことはサクツと無視して、長い髪をなびかせ、隣をすり抜けて行くあきら。男子便の前に立つと、曇りガラスの窓が付いたその扉を何の躊躇もなく開けた。覗く、なんてものじゃなく、堂々と開け放ったのだ。

「おいっ 何してんだっ」

俺はその袋をぐしゃつと握り潰して水道の横にあったゴミ箱に投げ捨て、男子便に足を踏み入れようとするあきらの肩をかるうじて掴んだ。

あきらはゆっくりと振り向き、漆黒の瞳に俺を映した。

「僕が入っちゃいけない理由でも？」首をかしげるあきら。

「ええ、ありますとも。大ありですとも。だって、あきらは女だろ。そんな堂々に入るのはちよつと問題ありですとも。」

「名前なんだっけ？」

「智仁（ともひと）ですとも。」

「ああ、だからとも言ってたんだ。」

「いや、ちげーから」

「ちがうの？」

「ちげーよ」

「ちえ、つまんね。」

「あのなあ」

「僕、女の子に見える？」

「は？ 見えるけど。なんで」

「髪が長いから？」

「いや、まあ」

「ふーん」もうこの話題には飽きたような気のない返事。

あきらは身を翻しその肩に置かれていた俺の手から逃れると、幸いにも無人だった男子便から手を引いた。

「ねえ、トモ。僕、音楽室に行きたい。」

俺より頭一つ分ほど低い位置からあきは言った。そしてあまりにも自然な流れで、作倉が呼ぶのと同じあだ名で俺のことを呼んだ。智仁だから、トモ。そう呼ばれる度に、なんて安易な理由で付けられたあだ名なのだろうと思う。いや、別に気にしてないって。全然気にしてないから。

「音楽室？ いいけど、ここから少し遠いぞ。」

自然すぎて、あだ名で呼ばれたことにも気付かない俺。

「いいよ」

にこりともせず、あきらはアーチ型に切り揃えられた前髪の下で静かにまばたきをした。

君の、その、（５）

＊

音楽室は相変わらず薄暗かった。植物には大事な養分でも、グランドピアノにはあまりよろしくない日光が外から入らないよう、一日の太陽の位置を考慮して設計されたというのがその理由だ。——とかいう、昔からある噂のようなそれは、本当か嘘か、設立者である初代校長がこの世を去ってしまった今では確かめようがなかった。

室に入ると、正面には、ひな壇のようになった座席と、それからその向こうに偉大な作曲家たちの肖像画が壁の上半分に並んでかけられている。異様に鋭い彼らの視線には何回ここに足を踏み入れても慣れることはできず、そわそわしていると。あきらめ、ドアの前で立ち止まったままの俺を通り越し、右側にある、黒い布を被ったグランドピアノに近付いていった。

俺は、ここへ来る途中に寄った職員室で適当な理由を付けて借りた音楽室の鍵を電気のスイッチの上に打ち付けられた釘に引っ掛け、バツハと目をあわせないようにしながら、他と比べて一段高くなつた床の上にある偉そうなグランドピアノの横にそろりと寄り添った。すでに鍵盤側に回り込んだあきらが『布を剥げ』と無言で訴えてくるもんだから、俺は『へいへい』と口の中で呟き、グランドピアノを覆う黒い布をするすると引っ張いた。

音楽室のドアに鍵をかけることで安心しているのか、ピアノ自体には鍵はかかっておらず、俺が布を取り去ると、あきららはピアノと高さの調節が可能な椅子の隙間に入り込み、半袖から伸びた細く白い腕で重い蓋を持ち上げた。そしてさらに鍵盤の上にあるけばけばした赤い布を掴み上げて床に投げ捨てると、立ったまま、白と黒の歯みたいなそれに叩きつけるように指を降ろした。

不協和音から始まったその曲は聞いたことのないものだった。

それでも、気が付くと心を奪われてしまったのは、口を開いたグランドピアノに今にも噛み付かれそうになりながら、何かに取り付かれたように上半身を大きく左右に揺らし音を奏でるあきらの、どこか遠くに思いを馳せるような表情が、純粹にきれいだったからだ。

それに、その表情を、その顔を、俺は知っていた。

忘れもしない6年前の夏。確かに見たんだ。同じ表情を浮かべ、音に溶けるように、ピアノに魂を吸い取られるかのように、永遠の時の中で響かせたあの旋律。

誰を思っこの曲を書いたのですか？

どんな嬉しいときにこの弾む音を紡いだのですか？

哀しいことがあったのですか？　ここだけ泣いているように聞こえます。

叫びたかったでしょう。

呪っていたのでしょうか。

誰を思っこの曲を書いたのですか？

「……あ」

その声にはつと我に返る。俺の声ではない。とすると……。

あきらの手元に視線を落とすと、鍵盤の上に細い指がまだ居座っているにも関わらず、閉じかけている蓋が目止まる。

――危ない。

咄嗟に手を伸ばし、鍵盤と蓋の間に滑り込ませる。あきらは動きを停止したまま手を引っ込めようとしない。

10センチほどの余裕を残し、俺はなんとか蓋を受け止めた。

「あつぶねえ」

久しぶりに心臓が止まりそうになった。走ってもいないのに息があがっている。背中にはいつの間にか冷たい汗が流れ、ワイシャツの下に着たTシャツが肌に張り付いていた。

手を挟まれる危機にあつたあきらはといえば、たつた今ゆっくりと手を引き抜き、「続き、忘れちゃった」と、なんとも間延びした抑揚のない声でそう言った。『あ……』というあの声は、蓋に骨を折られる危機感からあげた悲鳴ではなく、曲の続きを忘れ、思わず漏れた声だったのか。

俺は、少しずつ指をずらしながら重い蓋をぴたりと閉めた。そして、呪いを一時封印したかのように、とりあえず胸を撫で下ろす。それから改めて危機感のなさすぎるあきらに言った。

「ああゆうときは早く手え引っ込めろよっ」

それに対してあきらは、

「いいじゃん。別に指なんかなくなっても生きていける。」まるで unnecessary なものでも見るみたいに自分の両手を眺めながらそう言った。「そういうことじゃないっ」

「うるさいな」

「んだとっ」

掴みかからんばかりに俺が詰め寄ると、あきらは顔を上げ、その両手を俺の顔の前でぱつと開いて見せた。視界いっぱいにあきらの手のひらが現れ、俺は一瞬たじろいだ。

「単なる価値観の差だよ。僕はこの指をそんなに大事に思ってない、ただそれだけのこと。」

ああ、なるほど。

と、妙に説得力のあるその解説に思わず頷きそうになって、いやいや違うだろ。頭を横に振って考え直した。

「大事に思っただけでも大事だっ」

「なんで？」自分の考えに微塵も疑問を感じていない様子で首をかしげるあきら。

「なんでもっ 理由なんかないっ 大事なもんは大事なんだっ」

「誰がそんなこと決めたの？」

「む、昔の人だっ」

「昔の人？」

「そうだ」

「ふーん、おもしろい」

と言いつつも、少しも笑っていないあきら。言っていることと表情がまるでくい違っている。

君の、その、（6）

「僕は、この、どこから来たのか分からない体を、他人にくれてやるなんて簡単なことなんだ。ピアノの餌になったところで、なんにも哀しくない。」

言いながら、あきらは自分の首を締めるように片手で触れ、上目使いで俺を見た。

「こんな僕は、トモの目にはどんなふうに映るの？」

そう問われ、いつの間にか湿り気を失い上と下が張り付いていた唇をゆつくりと開き、どうやってもそんなふうにはしか見えない目の前の女子に正直に言っただけだ。

「どんなふうって。頭がおかしい女子としか……」

途端にあきらは半眼で睨んでくる。そして失礼極まりない言葉（お互い様だが。）を口にした。

「トモって、モテないでしょ。」

……はい。凶星ですが。

「んなことねーし。」見栄を張った。

「ふーん。やっぱり。」軽くため息をつくあきら。

「おい、なに納得してんだよっ」

「顔に書いてある。“否モテ”って。」

「ひ、否モテっ」

黙秘権を使ったところで効果はなく、モテないことがあつさりバレた。

そうすると、有本さんの顔には“大モテ”とか“モテすぎ”とか書かれているのだろうか。くそ。うらやましい。

「ねえ、そろそろ昼休み終わるんじゃない？」

あきらがそう言つと、すぐに午後の授業の予鈴が鳴った。

案内することには力を注いだが、担任に怒鳴られることが常な俺は、午後の授業に間に合うように教室へ戻る時間までを計算してい

なかった。予鈴が鳴った今も、たいして焦りはしなかった。それよりも否モテが気がかりだったとは確か。

「戻るか」

言って、俺は、あきらが床に放った鍵盤を覆うための赤い布を拾い上げた。黒く光る重い蓋を再びこじ開けてそれを敷き、もうこの頭のおかしな女子には関わらないほうがいいぞと、グランドピアノに心の内で囁いた。

音楽室を出るとき、あきらがまたおかしなことを言った。よくもまあ、そんなに次から次へとステキな言葉が思い浮かぶものだ。グランドピアノも呆れ気味のため息しか出ないだろう。

「トモが僕の運命を変えたんだよ。僕の指は、あのときにもぎ取られることになってたんだから。」

「いやいや。俺があそこにいる限り、あきらの指はくつついたままだつて。きつと。」

俺は小バエを追い払うみたいに、しっしっと手を動かしながらテキトーにあしらったつもりだったのだけど。あきは濃いまつ毛の下で黒目がちな瞳を輝かせ、親からはじめてのことを教わった子どもみたいに、だけど静かに、

「ほんとに？」

と、嬉しさと不安が入り混じったような顔で問うてきた。まるで暗闇で一筋の希望の光を見つけたみたいで、ずっと探していたものをようやく手にしたような。けれどそれはいずれも不安定なもので、手を伸ばすと逃げてしまうような、そんな素直に喜べない要素をあきら自身が抱えているように感じた。それでもあきは、俺の言葉にすがりつかんばかりに喜んでるように見えた。その姿は、頭のおかしな女子ではなく、少しかわいそうで、痛々しく映った。

「ほんと。」

心もとないそんなことしか言えない変わりに、俺はあきらの目を見て深く頷いた。

どんなふうに生きてきたんだろうって、気にしてみたりしながら。

「まだここにいる？」

気をつかってみたものの、あきらの返事は「いい。戻ろう。」だった。

音楽室の鍵を閉め、数分間世話になったその場所に背を向けて廊下を歩き出した。

授業に遅刻したことで担任に何か言われたらこう言ってやろうと思った。授業よりもだいじなことってあると思うんです。（真顔で

）

それから少しクラスの笑いものになって、当摩に冷やかな視線を送られ、作倉には肩をばしばし叩かれながら大笑いされる。

あきらの浮世離れた不思議な力に中てられ、束の間だったが日常から遠く離れたところにいた気がする。そのせいか、何でもない毎日の1コマが少しだけ、ほんとにほんの少しだけ、懐かしく思えた。

君の、その、（7）

＊

あなたは経験したことがあるだろうか。

背後を歩く不気味な人の気配と、自分の足音に重なって聞こえるもう一つの足音。

学校を出てからもずっと付きまとわれている。むしろ学校出る前から、か。道端の錆びたくずかごを蹴って悪ぶってみても、背中を丸めてジグザグに歩き変人を装ってみても、どうしても離れてはくれなかった。

家まであと少しと言うところなのだが、こういう場合はテキトーにふらふらして後ろの奴をまいてから帰宅したほうがいいのだろうか。

今一度問おう。あなたは経験したことがあるだろうか。いわゆるストーカー被害というやつを。

ふちに立ち止まってみると、後ろの足音も止んだ。これは確実に俺をつけて来ている。

怖いもの見たさから振り返ってみようかと思った。面倒なことになるのは目に見えているのに。

一度唾を飲み下し、ズボンのポケットの中で汗を握ったままの手に力を込め、おまえの狙いはこの俺なんだろう、と言わんばかりに後ろを振り向いた。

足を肩幅以上に開いて仁王立ちし、そんなこと無意味だと、もう一人の自分が言うのを無視してストーカーを威嚇した。

「だーかーらー、なんで付いてくんだよっ」

学校の校舎内にいる時からずっと付きまとってくるそいつに言った。

え？ まるで知り合いみたいな口調だって？ それは、ストーカ

ーの正体が、ピアノの餌になることも躊躇わない例のあいつだからだ。

「帰る方向がこっちなんだもん。」

そう言つて、しょうがないじゃん、という顔で腕を組むストーリーこと藤堂あきら。膝より少し上までの丈のグレーのタータンチェックのスカートから伸びた足を、俺に負けず劣らず大きく開いて仁王立ちで構えている。

「は？ 家どこだよ」

肩からずり落ちてきたカバンを元に戻すのも億劫だと感じた時、あ、自分疲れてるな、と思った。それがあきらのせいであることは、あまりにも分かりきっていることであつた。

あきらは仰け反るような姿勢で、情けなくも猫背になっている俺を見据えて言う。

「もうすぐ着く、はず。」

偉そうな態度のわりに曖昧である。

自分の家じゃねーのかよっ！と、身振り手振りも交えて盛大にツッコミを入れようかとも思ったのだが、また機嫌を損ねて否モテなどと呼ばれかねないのでやめておく。

「トモは？」

むしろ突っ込む間を与えないくらいのスピードであきらはそう問うた。

「俺ももうすぐ着く。」

「えー、近所かよ。」あからさまに嫌そうな顔をするあきら。普段はほぼ無表情な癖に、こういうときだけ感情表現に長けている。

「おい、なんだその顔」

「まあ、いいや」

その上、俺を無視して勝手に話を打ち切ろうとする。こちらサイドは何もよくないのだが。

「僕、この辺にある（はずの）民宿に下宿するんだ。」

それを聞いて嫌な予感を抱かないわけがなかった。

この辺にある民宿と言えば、読みにくい達筆で書かれた『民宿佐和』の看板しか思い浮かばない。生まれたときからこの地に住んでいるが、商売敵の噂は聞いたことがないし、もちろん見たこともない。

ここは一度落ち着いてから話を切り出そう。今朝、母さんは何か言っていたらどうか。新しい下宿人が来るなんて、俺は何も聞かされていないのだが。

「いや、待て。血を流す当摩を見て貧血を起こした母さんは数分で復活した後、味噌汁を茶碗に注ぎながら何か言っていなかったか？ 不機嫌そうに頬に絆創膏を貼った当摩の怒りの炎に気を取られていて、母さんが何か言っているのに対し、俺は生返事しか返さなかったような…。あのときか。」

俺は、どうも運のついていない今朝を思いだしながら両手で頭を抱えた。なんてこった。なんてこった。

「…ちなみに聞くけど、何て言う名前前の民宿に行こうとしてんだ？」
本心では聞きたくないけど、これは確かめておかなければならないことだろう。

あきらは背後から夕日に照らされ、輪郭をオレンジの輝きに縁取られていた。それはまるで後光を背負っているかのようで、言いたくはないがなかなか綺麗である。長い黒髪はあきらの生^{せい}そのものように生き生きとしていて、まつ毛の下その強かな瞳は逆光をも引き立て役にし、日向では見たことのない凜とした眼差しを披露した。

けれど、このタイミングでの太陽の粋な計らいは余分なものでしかなかった。

あきらがもつと普通の女子で、出会い方が180度ほど違っていたら、夕日のなかできらめくその姿を素直にきれいだと思えたかもしれないが、残念ながら、もうやり直しはきかないのだった。

「民宿の名前？ 教えなきゃダメ？」

またもやあきらは嫌そうな顔で言った。

君の、その、（８）

「教えるよ」

そんな顔をされ、なんだか下手に出るのは気が引けたので強めな口調で言うつと、

「何、その命令口調。サイアク。もう絶対教えない。サイアク。」
あきらは即座に機嫌を悪くした。

「おい、ふざけんな」

引つ込みが付かなくなるとはこのことで、今まであきらに対してへこへこしていた自分が『やめておきなつて！』と頭の片隅で警告しているのにも耳を貸さず、再び強く出た。

そのときだ。ぶちん、と、細い糸が切れるような気配がしたのは、
「…ふざけんな、だと？ どっちがだ」

言うつて、あきらはアーチ型に切られた前髪の下で猫のような目を吊り上げる。そして、これは勝手な想像だが、おそらく前髪に隠れた眉毛もありえない急角度で吊りあがっていることだろうと俺は思う。

あの音は、あきらが本気で怒り出す合図だったようだ。もしくは、激情したあきらの頭に全身の血液がいつきに集中し、細い血管が数本切れたか。いや、それでは脳内出血で言い争いどころではない。冗談が過ぎた。

「トモは僕を怒らせる天才だね。今ね、地獄の谷底でぐつぐつしてゐるマグマみたいに腸が煮えくり返ってるよ。まじで。」

「はは。それはけっこう。こちらら、メガネかけた草食男子を毎朝飽きずにぐつぐつさせてるからさ。人を怒らせにかかったら右に出るヤツはいねんだよ」

「そうなんだ。道理で生まれて初めての感覚だと思ったよ。その首をきゅって締めてあの世に送ってやりたい衝動に駆られてる。ていうか、褒めてないから。」

「おまえがこの首を獲りに近付いてきたら、そのお綺麗に揃った前髪をタイタニック号の先端みたいに切つてやるよ」

「たとえばマニアック過ぎて想像に困るよ。ぼちぼちネタ切れかな？」

「おまえなんかに分かりやすいたとえ使つてなんの得になるんだよ」

「…ふん」

「おい、どっちがネタ切れだ」

「は？ 疲れたただだよ。」

「ふざけんな」

「ふざけんな、だと？ どっちがだ」

「そっちがだろ」

「そっちだよ」

そっち、そっち、って。結局どっちがふざけているのか最終的に分からなくなつて、何からこんなくだらない言い争いが始まつたのかさえも遡るのが面倒で、つまりここまで脳をフル活用する意味はもはやなくて。一つ言いたいのは、こんなにもボキャブラリーが充実していたことに俺は今うつすらと感動している。

「おいおい、悪ノリも大概にしてくれたまえ」

と、怒っているのかそうでないのか分からない様子であきら。

また珍妙なしやべり方だなあと思いながら、俺は視力があまりよろしくないヤツ（たとえるなら当摩とか、当摩とか、当摩とか）がそうするみたいに目を細めて鼻の頭にシワを寄せ、ため息を吐くあきらを見つめた。

「僕がお世話になる民宿の名前、そんなに知りたいの？」

言つて、あきらは俺の顔を見て、変な顔、と軽く口角を持ち上げ鼻で笑う。コノヤロ、と思つた。

「いや、それほど知りたくは…」

反抗心は萎まず、あるかないかも曖昧なちっぽけプライドのせいで素直になれなかった。

「うん、て顔かないなら教えてあげない。」

「……」

こいつ、あきらはいつたい、俺に何を求めているのだろう…。親の顔が見てみたいと思ったのは俺だけだろうか。いい意味ではない。悪い意味で。

もしあきらの親に会うことがあるなら、こんなにも立派な娘さんを育てるにはどうしたらよいのでしょうか、と失礼のないよう、至極丁寧に問うてみたい。まったく、幼少期にどんな絵本を読んだらこんなふうになるのか疑問だ。

坂をのぼり切った場所に立っている今、ここからでは下降して行った太陽はもう見えなかった。オレンジの光が褪せて茶色くなったものが、微かにあきらの足元に伸びている。今日という日があったことの証明は、もはやそれだけしか残っていなかった。

それを見下ろしつつ、俺は仕方なく頷くための心の準備をする。息を吸って、吐いて。もう一度吸い込み、背筋を伸ばす。そして顎を引くと。

そのタイミングで犬が一匹坂を上がってきた。野良犬かと思いきや、それに続いてピンクのエプロンをしたおばちゃんが海から上がって来たみたいに息を切らせながら坂の上に現れた。おばちゃんと犬を繋ぐリードを見て、この時間帯恒例の犬の散歩というやつだということに気付く。

なんだか出鼻を挫かれてしまい、頷くタイミングを逃した。が、まあ、いい。

この一人と一匹が通り過ぎてから再度試みよう、一時の癒しとばかりに犬のしわくちな顔に視線を落とした。が。

「ねえ、今、土下座して」

と、おもしろいことでも思いついたみたいな顔であきらは言った。そのとき俺の頭に浮かんだのは、あきらの頭がおかしいのか、それとも俺の耳がおかしいのか、どっちがおかしいのかという疑問だった。

やはり凝り固まった心には動物だ、と、ほんの一瞬気をゆるめ

ていたため、そのとんでもない発言を、俺は無防備な生身のからだでもろに喰らうこととなった。

「は？ 土下座？ 正気か貴様っ」

犬からあきらかに視線を戻し、混乱でいつの時代だか分からないしやべり口調で言う。いや、無意識だから。普段こんな言葉使わないだろ、普通に考えて。

「さっきから言ってるじゃん。土下座しないと許さないって」

「土下座とか、初耳ですが。それより許さないって、何？」

「サイテーっ あんなことしといて謝りもしないなんてひどい男っ
しかも忘れたふりなんてサイテーっ」

サイテーとひどいが繰り返し使われたあきらのその発言を受け、
なんだか突き刺さりんばかりの強い視線を感じた。

犬の首から伸びた赤いリードをたどると、ピンクのエプロンのお
ばちゃんと目が合った。心なしか、睨まれている。

…いやいや、気のせいではない。確実に女の敵を見る目で俺を見
ている。

そしてよく見ると、きついパーマをかけたぐるんぐるんの髪の毛
のそのおばちゃんは、俺の家の隣の隣に住んでいる田中さんだった。
おい、田中。よりもよってなんでこんなときに犬の散歩してんだ
ようう。思わず心の声が漏れそうだった。

これ以上無実の罪で睨まれるのは勘弁だったから、あきらの手を
つかんで引き寄せ、あることないこと言いたい放題のその口を手で
覆った。

「ははへっ ほのはははほっ ほんなほとひほいてははへふむほほ
ほふはほっ」

俺の手の内でもお構いなくしゃべり続けるあきらは、口を塞ぐ俺
の手を、つかまれているという片方の手だけで引き剥がそうと勤し
んでいる。

俺は、暴れるあきらを押さえ込みながら、田中さんに、
「はは、どうも。こんにちばんは」

と、太陽が沈み切らないこの微妙な時間帯にこんにちはとこんばんはのどちらを使えばいいのか分からず、とりあえず合体させ、引きつり気味の笑顔でそう挨拶した。

それに対し田中さんは、最近の若者は、という目をした後でため息を吐き、「こんばんは」と、口元にうつすらと笑みを浮かべながらさざりと言う。そして「あんまり女の子泣かせるんじゃないのよ」と付け足した。

俺は、もう笑うしかなかった。「はは」

あきらの無駄に上手い演技にまんまと騙され、完全に俺に否があると誤解したまま、田中さんは電信柱のにおいを嗅ぎ続ける犬を無理やり引っ張ると俺たちの横を通り過ぎ、すぐそこにあつた角を左へと曲がって行った。

君の、その、（９）

「民宿、佐和」

と。ようやくあきらが滞在する民宿の名を口にしたときには、オレンジ色の光もセピア色の影も消えうせ、日が暮れていた。さつき通り過ぎていった田中さんは完璧に帰宅しているだろうし。それどころか、夕食の支度も終盤に差し掛かっている頃だ。

「その民宿が実はトモの家でした、とか、そういうオチいらないから。」

減らず口を叩きながら俺の後について来るあきら。疲れ果てたこの俺の背中を見て、察することは何もないのだろうか。こんなにもこんなにも、背中で訴えているというのに。まさにその通りの“オチ”であると。

言いにくさと同時に、家にこんなヘンテコな女子が来ることを認めたくなくて、ここまで何も言わずに黙って歩いてきた。が、『民宿 佐和』の看板はもはや前方にばっちり見えている。このまま真実を明かさず、何食わぬ顔で玄関の引き戸を開け、何食わぬ顔で「ただいまー」と言つて、何食わぬ顔で帰宅するというのも悪くないだろう。ただ、あきらは思い切り怪訝そうな顔をするだろうが。

自宅に掲げられたその看板を見てみぬふりしながら、手前にある田中さん宅の前を通りかかると、生ぬるい風に乗って煮物のようなあまじょっぱそうな匂いが漂ってきた。それから、網戸になっている窓から、微かに笑い声が聞こえてきた。子ども全員が自立した田中家には今は、さつきの犬の散歩のおばさんと、ついに定年を迎えたらしいおじさんだけが住んでいた。

長年連れ添った二人。どんな会話に笑い合うのだろうか。

「お父さん、今日の煮物、おいしくできましたよ。」
と、いいタイミングでそんな声が聞こえた。

が、それは網戸の窓からではなくて、俺の後ろにいるあきらの声

にそっくりだった。

そして振り返ってみると、あきらはまるでお椀を包むように、からっぱの両手を胸の前で構えていた。

あきらも、同じことを考えていたのだろうか。田中さん夫妻が笑い合った会話を、想像してみたりしたのだろうか。そうだとしたら、ほんの少しだけ、人差し指と親指の指先の間隔で表すなら1ミリほどだけ、嬉しかった。

「お父さん、いかがですか。」

そう言ったあきらの顔は無表情だったが、役になり切っているようで、経験したこともないだろうに男の散歩後ろを歩く良妻の雰囲気を漂わせていた。

わがままだったり、頼りなさげだったり、狂っていたり、時々良妻だったり。藤堂あきらの本当の顔はいたいどれなのだろうか。どれも本物で、でもどれも偽者のようだ。たった一つの藤堂あきらを探ろうとすればするほど、底が知れなかった。

「いつもうまいよ。母さんの料理は。」

俺がそう言っていると、あきらは笑った。

「ありがとう、お父さん」

風が、あきらのアーチ型の前髪を揺らした。隠れていた眉毛が一瞬だけ見えた。目と口には笑みをたたえているくせに、なぜかその眉毛だけがハの字だった。

「母さんは、困った顔をして笑うんだな。」

今までならこんなことを言えばすぐに、あきらは反論してきただろう。けれど。

「そうですよ。知らなかったの？」

あきらはいたって穏やかにそう言って、微塵も怒ったりしなかった。

「知らなかった。ごめん。」

そして俺は、なぜか軽く頭を下げて謝った。

*

「ただいまー」

引き戸を開けて家の中へそう呼びかけると、赤く腫れた頬がずきずきと痛んだ。

母さんの「おかえりー」が廊下の突き当たりにある台所から小さく聞こえて、次いで、正面にある階段から、俺よりも先に帰宅していたらしい、白い半袖Ｔシャツにベージュ色のチノパンという私服姿の当摩が本を読みながら降りて来きた。黙って目の前を通り過ぎていくのかと思えば、当摩は、本に落としていた目をこちらに向け、メガネを押し上げると。

「どうした、バカめ。ゴリラにでも殴られたか。」と、涼やかに言った。

「ゴリラなわけねーだろ。もしゴリラを放し飼いにしてるやつがいたら即訴えるからな、俺。ていうか、ゴリラじゃねーから。ゴリラみたいな女に殴られたんだよ。」

確かに、あきらが黒板に豪快な字を書いたあのときは、その後ろ姿を見てゴリラみたな顔をしているのではないかと想像したことはあったけれど、ゴリラにはまったく似ていなかった。暴れようはゴリラに値するかもしれないけども。

「は、不幸なバカだな。その女の親がもうすでにゴリラを放し飼いにしてるぞ。訴えて来いよ。」

「だから、ゴリラじゃねーからっ」

当摩はどうでもよさそうに「ふん」と言って再び本に目を落とすと、母さんがいる台所兼、食堂に向かっていった。そういえば、もう夕飯の時間だ。

本を持っていない左手を当摩が振る度、Ｔシャツの背中の中のシワが伸びたり縮んだりする様を、俺はしばらく睨みつけていた。が、当摩が何のダメージも喰らっていないことに気が付き、やめた。

当摩が台所兼、食堂の入り口に架かったのれんの向こうに姿を消

すと、俺は玄関に一人残された。

ふと、忘れかけていた頬の痛みがぶり返し、俺の頬を打った直後のあきらの傷ついたような動揺した顔が浮かんた。

一、二歩後ずさったあきらは俺に背中を向け、民宿より向こうに走り去ってしまった。何しろ辺りは暗く、姿が見えなくなるまでその時間はかからなかった。それでも時々、街灯の光の届く範囲にあきらが入ると、小さくなつてく後ろ姿を見ることが出来た。

なぜそんなに悠長に構えて追いかけずに見送っていたのかと言うと、情けないことに、足が一步も動かなかったのだ。

実はあれから、夫婦ごっこはしばらく続いていた。

夕食の下りから少し発展して。あきらに手の甲を突かれ、次の瞬間には手を繋いでいた。

あきらが俺の前に回りこんできて、背伸びをした。

この時点で俺はもう一步も動くことが出来なかった気がする。あきらが持つ不思議な力に中てられ、近付いてくる、白い肌に咲いた残酷なほどに真っ赤な唇を、ただ見つめていた。

「君の、その、」

息のかかる距離で、あきらが何か言いかけた。

続く言葉を大人しく待っていると、いきなり胸を強く押され体を突き飛ばされた。

「あき……」

俺が言いかけると、あきらは、聞きたかった言葉の続きの代わりに平手を繰り出した。

叩かれるその一時、世界がスローモーションに見えた。咄嗟に目を瞑る動作も異様にゆっくりに感じられたのだ。

乾いた音がした直後には痛みは感じず、肩で息をするあきらの姿に焦点が合つていく中で、徐々に熱を持った頬に気が付いた。

あきらは自分がしたことに驚愕し、ひどく傷ついているようだった。その脆弱な様を見て、俺もなんだかやるせない気持ちになった。開きかけの唇に張り付いた髪の毛を取ろうともせず、俺を見てい

るあきらを、自分がどんな目をして見ているのかが気になった。この目がもし心の動揺を映していたり、弱々しかったり、あきらを不快にさせるものだったとしたら、それが怖かった。

俺がいつまでも目をそらせずにいると、あきは靴底のすれる音とともに一、二後ずさった。

このままではあきはどこかへ行ってしまう。あきの纏う空気が急によそよしくなり、不安になった。言葉でも手でも、何でもいいから引きとめる術を探したけれど、いつだってあきは俺に口を開くほんの少しの間すら与えてはくれない。

そうこう考えているうちにあきは走り去った。

そう、分かつての通り、俺は追いかけなかった。

「トモー、夕飯できてるわよー」

靴も脱がずに玄関でぼーっと立っていると、母さんの声にはっとした。瞬間、瞼の裏にこびりついていたあきの残像が少しだけ薄らいだ。

「ご飯、どのくらい盛るの？ 中盛りー？ 大盛りー？」

台所から問いかけてくる母さんに、「いま行く」と答える。カスカスの掠れた声だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6654q/>

永久に、待ちぼうけ

2011年7月10日03時18分発行